

広島大学教育学部のAO・推薦入試に関する探索的研究

－教員・学生への質問紙調査－

研究代表者 小川 佳万 (教育学講座)
研究分担者 久井 英輔 (教育学講座)
研究協力者 小野寺 香 (奈良女子大学)

I 研究の背景と目的

1. 研究の背景

現在、国立大学協会はAO・推薦入試を含む多元的な選考方法による入試で募集総定員の30%を入学させることを2021年度までの目標として掲げ(国立大学協会, 2015), 各大学は目標値を設定しその達成に努めている。例えば東北大学が現行の約20%から30%へ, 名古屋大学では現行の17%から35%への増加を目標とし(高校生新聞, 2017), 広島大学でも積極的にAO・推薦入試を実施してきた(杉原他, 2015)。

そもそも大学側がAO・推薦入試を実施する理由は, 端的に言えば基礎学力に加え筆記試験では測定困難な「優れた資質・能力」を有する受験者を選抜することである(国立大学協会, 2015)。例えば広島大学教育学部のアドミッションポリシーにおいては, 次の(1)から(4)に当てはまる学生, すなわち(1) 高等学校での基礎的・基本的な学力を幅広くきちんと身につけ, 自ら考え, 学ぶ意欲を持つ人, (2) 広く人間の心や教育又は初等・中等教育における各教科に強い興味・関心・情熱を持つ人, (3) 自らの問題意識に基づいて, 主体的に学修や研究を遂行し, 物事に多面的, 創造的にアプローチする人, (4) 子どもを愛し, 将来, 教員になることを希望する人, 又は大学院に進学し, 研究者や専門家になることを目指す人, を求めており(広島大学, 2018), それはAO・推薦入試についても該当する。

他方, 2008年に公表された中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の審議状況に関する報道において, AO・推薦入試は学力不問であること, 「青田買い」であること等の批判がなされて以降, そうした指摘がしばしばされる(倉元, 2011)。また, 受験生にとっても, 長期間に及ぶ準備を強いられる筆記試験を必ずしも受験する必要がなく, さらに早期に合格が決まることがAO・推薦入試の受験要因となることが指摘されている(ベネッセ教育研究開発研究所, 2012)。これらは, AO・推薦入試に対する意図が大学と受験者で一致していないことを示唆する(読売新聞教育部, 2016)。

ところで, AO・推薦入試の拡大に関する近年の研究では, 同入試による合格者の大学入学後のパフォーマンスを検証する実証研究(中西, 2017), 公正性を伴った多元的評価尺度の構築に関する研究(菊池他, 2017)等が行われている。AO・推薦入試に関わる当事者を対象とした同入試に対する認識については, 受験回数の増加と評価尺度の多元化という観点から, それぞれのメリット・デメリットについて高校教員と受験生の認識分析がなされている(大谷, 2013)。また, 主に受験者に着目し, 入試における多様な評価方法に関する認識について分析したものもある(西郡, 2013)。

本研究も、受験機会の増加と評価尺度の多元化を観点として、広島大学教育学部においてAO・推薦入試に関わる大学教員と学生（受験者）の認識について探索的に分析を行い、本学部AO・推薦入試の機能について手掛かりを得ることを目的とする。

2. 実施方法

本研究は、AO・推薦入試に関する大学教員と学生の認識について実証的に分析することを目的とするものであり、そのために2018年12月にインターネットを通して質問紙調査を実施した。対象は広島大学教育学部に所属する全教員172名であり、77名から回答を得た（回収率45%）。また、教育学部の学部生全員2,002名も対象とし、369名から回答を得た（回収率18%）。

以下では、それらのデータを基に、学生がAO・推薦入試を受験した理由、一般入試受験者とAO・推薦入試受験者のAO・推薦入試に対する認識、大学教員とAO・推薦入試受験者間の認識の差を分析していく。（久井英輔*）

II 学生側の戦略

1. AO・推薦入試受験の理由

既述のとおり、AO・推薦入試の意図については、大学と受験者では認識が異なることがしばしば指摘される。これについて広島大学教育学部を事例に明らかにするために、まずは学生がAO・推薦入試を受験した理由について検討する。図1はその結果である。

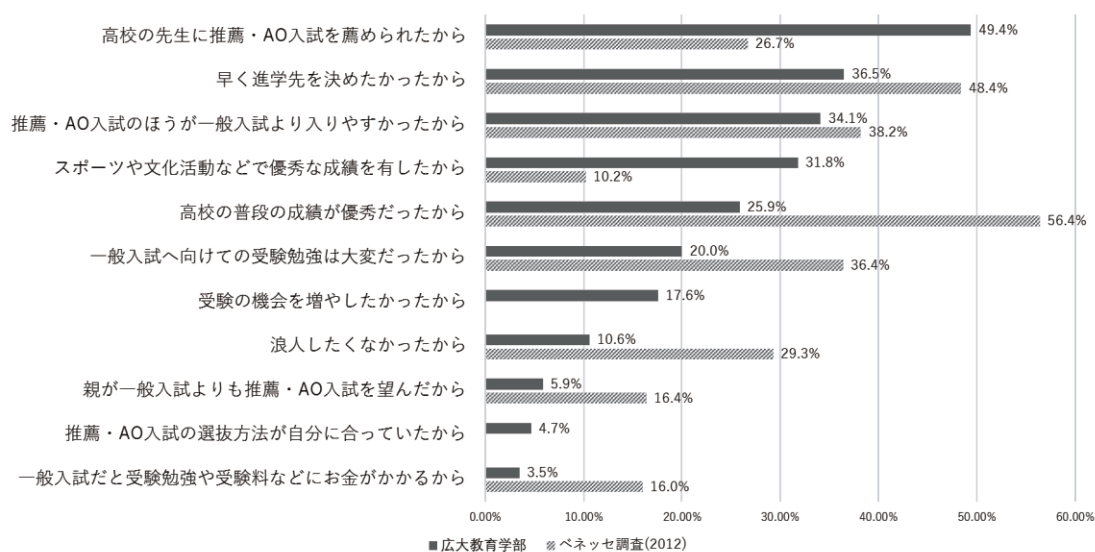


図1 AO・推薦入試受験の理由

本調査におけるAO・推薦入試の受験理由に関する項目は、2012年のベネッセ教育研究開発センターによる「大学生が振り返る大学受験調査」で使用されたものと一致させ、それとの比較を可能にした。なお、同調査は、大学の多様性を考慮し、模擬試験における偏差値によって対象の大学を分類している。本調査では、広島大学も含まれる偏差値60以上の大学を対象として実施された調査結果を比較対象として用いる。

本調査で、AO・推薦入試の受験理由に関する項目へ回答したのは、AO・推薦入試受験

者（85名）である。回答は複数項目の選択を可能とし、自由記述欄も設けた。一部回答者より自由記述の回答を得たが、その内容は既存の項目との親和性が高いものとそうでないものに区別された。前者は既存の項目に加え、後者は新たに項目を作成した（「推薦・AO入試の選抜方法が自分に合っている」「受験機会を増やしたかったから」を新たに作成。）。

図1より、広島大学教育学部の場合、AO・推薦入試受験に至った理由は「高校の先生に薦められたから」が最も多く、ベネッセ教育研究開発センターによる調査結果と比較しても高くなっている。進学校であればあるほど高校教員はAO・推薦入試に否定的であると指摘されるなか（山下，2011），大学が広く高校教員に対してAO・推薦入試の説明を行うことの重要性を指摘できる。ベネッセ教育研究開発センターによる調査結果よりは低いが、本調査において次に回答割合が高いのは、「早く進学先を決めたかったから」である。本学部AO・推薦入試の場合、15募集単位（コース）のうち7つにおいて12月に最終合格者が決定する。また、それ以外の募集単位ではセンター試験終了後の2月に正式な合格発表がなされるが、12月の時点で仮合格が出されるため、早く安心したい受験生にとっては受験を決める要因となり得る。続いて回答割合が高いのは「スポーツや文化活動などで優秀な成績を有したから」であり、学力に限定されない多方面での活躍実績を有する受験生が、それをAO・推薦入試では評価されると認識していると解釈できる。

図1において、ベネッセ教育研究開発センターによる調査結果よりも本調査結果の方が顕著に低いのは、「高校の普段の成績が優秀だったから」が挙げられる。これは、広島大学教育学部AO・推薦入試の出願要件に、一定水準以上の評定平均値を設定していないことが関係すると考えられる。また、上記のとおり、学力に限定されない多方面での活躍実績を評価対象とされるという認識があることも結びつく。さらに、「推薦・AO入試のほうが一般入試より入りやすかったから」「一般入試に向けての受験勉強が大変だったから」も同様の傾向がみられる。本調査結果では、AO・推薦入試の受験に対して、そうした消極的な理由は比較的少なく留まっている。ただし、それでも両項目の回答者割合が20%であること、さらに上記のとおり「早く進学先を決めたかったから」の回答割合が36.5%であり、AO・推薦入試の受験理由として「受験機会を増やしたかったから」を挙げたのがおよそ14%に留まっていることに鑑みれば、広島大学教育学部においても受験生は同入試に受験機会の増加を期待するより、戦略的に、一般入試の忌避としてAO・推薦入試の受験を選択しているとも言える。

2. 時系列にみたAO・推薦入試受験の理由

広島大学教育学部のAO・推薦入試の受験理由は、図1において確認されたが、それらと受験を決定した時期にはどんな関係がみられるだろうか。それを示したのが図2である。受験を決定した時期については、高校1年、2年、3年春、3年夏秋（AO・推薦入試の出願直前。出願は10月。）、高校卒業後、を選択肢として設け（「中学またはそれ以前」の選択肢も設けたが図へは省略）、いずれかを選択する形で回答を得た。図1では受験理由については11の選択肢を示したが、ここでは図の見やすさを優先させ、割合の小さい5つを「その他」として統合した。

図1で受験理由として最も回答割合が高かったのは「高校の先生の薦め」であるが、図2でその割合はどの時期も高い。なかでも特に「高校3年の夏秋」に最も高い。AO・推薦

入試の出願直前の薦めによって受験を決意したことが推測できる。一方、AO・推薦入試を受けることにより「早く進学先を決めたかった」を理由としている回答も、「高校卒業後」以外のどの時期も20%前後で推移している。

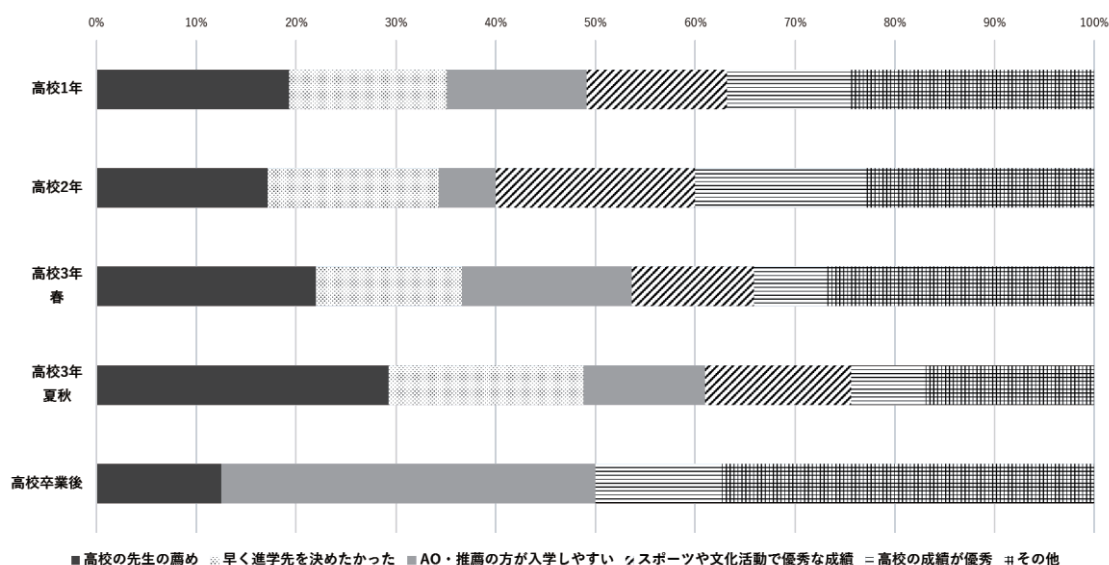


図2 広島大学教育学部の受験決定時期とAO・推薦入試受験理由の関係

なお、教育学部の場合、AO・推薦入試は既卒生も受験可能であるが、その受験理由は「AO・推薦の方が入学しやすい」という理由が多数を占めている。既卒生が「入学しやすい」と感じていることは、「一般入試の勉強が大変」(図2では「その他」に括られている)の割合が67%と高いことから推察できる。(小野寺香*)

Ⅲ 学生間の認識の違い

1. 特別入試に対する認識の違い

上述のとおり、AO・推薦入試に対する意図が大学と受験者で一致しないことは指摘されている。それでは、広島大学教育学部の学生はAO・推薦入試をどのように認識しているのだろうか。本調査では、AO・推薦入試への認識に関する項目について、5段階(「とてもそう思う」5,「ややそう思う」4,「どちらともいえない」3,「あまりそう思わない」2,「全くそう思わない」1)のうち、いずれかを選択する形で回答を得た。表1は、AO・推薦入試受験者と一般入試受験者の各項目に対する回答平均値を示している。

表1から、AO・推薦入試受験者と一般入試受験者の回答平均値の間には5項目に有意差がみられる。それらの項目は、AO・推薦入試に対して肯定的なものと否定的なものに区分できる。前者は、「AO・推薦の増加に賛成」「AO・推薦入試は積極的・意欲的な人が受験」「AO・推薦入試は公平な制度」であり、全てAO・推薦入試受験者の方が回答平均値は高い。一方後者は、「AO・推薦入試は努力をしない人が受験」「AO・推薦入試は要領のいい人が受験」が該当し、一般入試受験者の方が回答平均値は高い。

大学入試で面接の受験経験がある者となない者では、前者の方が面接試験に対する公平性の認識と面接試験一般に対する親和性が高いことが指摘されているが(西郡, 2013), 本調査結果も同様の傾向がみられる。AO・推薦入試受験者は自らが経験した選抜ルートを否定

するとは考えにくいいため、それらに対して肯定的な反応を示すとも言える。

表1 AO・推薦入試受験者と一般入試受験者のAO・推薦入試に対する認識の差

質問項目	AO・推薦入試受験者	一般入試受験者	差
受験勉強は大変だった	4.12	4.12	0
入学が決まった時嬉しかった	4.74	4.62	-0.12
AO 推薦と一般では求められる学力が違う	4.44	4.37	-0.07
センター試験は必要だと思う	3.93	4.02	0.09
AO 推薦の増加に賛成	3.42	2.82	-0.60**
AO 推薦入試は評定平均が高い人が受験	3.42	3.57	0.15
AO 推薦入試は積極的・意欲的な人が受験	4.38	4.01	-0.37**
AO 推薦入試は秀でた特技がある人が受験	4.00	4.08	0.08
AO 推薦入試は公平な制度	3.40	3.04	-0.36**
AO 推薦入試は要領のいい人が受験	2.76	3.12	0.36*
AO 推薦入試は努力をしない人が受験	2.02	2.50	0.48**
AO 推薦入試は準備時間を浪費する制度	3.29	3.08	-0.21
AO 推薦入試は一般入試に比べて入学しやすい	2.79	3.03	0.24

**：p<.01 *：p<.05

一方で、多数を占める一般入試受験者が AO・推薦入試に対して否定的な認識を示すことについては、例えば「AO 推薦入試は公平な制度」に対する回答平均値が表すように、受験生からは選抜基準がよく見えないことと関係すると考えられる。基準が不明であるからこそ、「努力」の成果よりも「要領」によって合否が決まると認識されることが推察される。この点について、評価尺度の多元化に伴い、生徒のみならず高校教員においても、AO・推薦入試の合否判定基準の不透明さを認識していることはすでに指摘されている（大谷，2013）。また、有意差はみられないが、AO・推薦入試受験者と一般入試受験者の両者の回答平均値がともに高いのが「AO 推薦入試と一般では求められる学力が違う」であり、これも AO・推薦入試に対する上記の認識の差と関係すると言える。

2. 合格要因の差

受験生は、AO・推薦入試と一般入試で求められる学力は異なると認識していることを踏まえると、各入試区分における合格要因の認識も異なることが予想される。これを明らかにするために、6つの質問項目に対する回答平均値を示したのが表2である。回答は5段階（「とてもそう思う」5、「ややそう思う」4、「どちらともいえない」3、「あまりそう思わない」2、「全くそう思わない」1）のうち、いずれかを選択させる形で得た。

表2 が示すとおり、6項目のうち有意差がみられるのは5項目である。まず「先生のサポート」、「学校の授業」、「計画的な勉強」は一般入試受験者より AO・推薦入試受験者の方が高く、一方、一般入試受験者の方が高いのが「塾・予備校で受験対策をすること」と「模擬試験を受験すること」である。

表2 合格要因に関する一般入試受験者とAO・推薦入試受験者の差

項目	AO・推薦入試受験者	一般入試受験者	差
学校の授業にしっかり取り組むこと	4.30	3.87	0.43**
学校の先生のサポート	4.39	3.86	0.53**
塾・予備校で受験対策をすること	2.21	2.77	-0.56*
模擬試験を受験すること	2.69	3.71	-1.02**
計画的に勉強すること	4.13	3.80	0.33*
仲間との競争	3.26	3.40	-0.14

**：p<.01 *：p<.05

AO・推薦入試受験者に対する高校教員の投入コストが極めて大きいことは次のとおり指摘されている。AO・推薦入試自体が、志望理由書等の書類提出以外に面接や小論文等を課す場合が多く、その指導は個別指導になるのが一般的であり、しかもそれに関わるのは複数の教員である。さらに、特にAO入試は全ての希望者が出願可能な場合もあり、したがって様々な資質・能力を有する生徒の受験を教員が丁寧に支える必要が生じる(西郡, 2013)。こうした合格要因に関する認識の差異は、AO・推薦入試と一般入試で求められる学力は異なるという認識と関連する。

3. AO・推薦入試合格者の認識

学生は、AO・推薦入試と一般入試において求められる学力は異なることを認識していることが上記より確認できたが、AO・推薦入試ではどのような学力が測定されると認識しているのだろうか。

本調査では、全回答者のうちAO・推薦入試の受験者は85名であり、そのうち合格した者は63名であった。またこの63名のうち、仮に一般入試を受験した場合、合格したと思うと考えるのは19名(30.2%)であり、不合格と考える者が26人(41.3%)であった(28.5%は「分からない」と回答した)。こうした彼らの「一般入試では合格しなかったかも知れない」という認識は、端的に言えば、教科・科目の筆記試験であれば十分な得点が獲得できないかもしれないという不安感を示していると考えられるが、逆にどのような学力によってAO・推薦入試で合格したと認識しているのだろうか。換言すれば、AO・推薦入試には「小論文」や「調査書」等の複数の評価方法があるが、それらは学力のどの領域を測定すると考えているのだろうか。なお、学力については、各種の答申の説明にあるとおり、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協調性」の3つの領域で示すことが一般的である(高大接続システム改革会議, 2016)。それを踏まえたうえで広島大学の場合は、「主体性・多様性・協働性」を「関心・意欲・態度」と「主体性・協働性」に分けて捉え直している。本論では、学力を広島大学に従って捉え、調査を行った。

本調査では、広島大学教育学部がAO・推薦入試で活用している評価方法(表3にある「小論文」「調査書」「自己推薦書」「面接」「センター試験」)が学力4領域のそれぞれについてどの程度測れるかに関して回答を得た。回答は5段階(「とても評価できる」5、「やや評価できる」4、「どちらともいえない」3、「あまり評価できない」2、「全く評価でき

ない」1)のうちいずれかを選択する形とした。表3の数値は回答平均値であり、AO・推薦入試合格者のうち「一般入試でも合格したと思う」者と「合格しなかったと思う」者に分けて示した。また、両者の平均値の差も示した。

表3 AO・推薦入試合格者の学力観

項目		一般入試でも合格したと思う	一般入試であれば不合格だったと思う	差
小論文	関心・意欲・態度	3.42	4.00	0.58
	主体性・協働性	3.16	3.65	0.49
	思考力・判断力・表現力	3.68	4.62	0.94*
	知識・技能	3.42	4.15	0.73
調査書	関心・意欲・態度	3.95	4.38	0.43
	主体性・協働性	3.79	4.12	0.33
	思考力・判断力・表現力	3.42	3.92	0.50
	知識・技能	3.47	3.31	-0.16
自己推薦書	関心・意欲・態度	4.42	4.62	0.20
	主体性・協働性	3.89	4.23	0.34
	思考力・判断力・表現力	3.47	4.19	0.72*
	知識・技能	3.11	3.15	0.04
面接	関心・意欲・態度	4.26	4.88	0.62**
	主体性・協働性	4.00	4.62	0.62**
	思考力・判断力・表現力	4.37	4.81	0.44*
	知識・技能	3.89	4.42	0.53
センター試験	関心・意欲・態度	2.47	3.04	0.57
	主体性・協働性	2.32	2.50	0.18
	思考力・判断力・表現力	4.32	4.08	-0.24
	知識・技能	4.68	4.85	0.17

**：p<.01 *：p<.05

両者とも、ほとんどの項目の平均値が3以上であり、AO・推薦入試で総合的な学力を測られると考えていることが全体的傾向として指摘できる。そのなかで、両者の平均値に有意差がみられた評価対象は「面接」である。学力4領域のうち、「知識・技能」以外の3つについて有意差がみられる。これは、「一般入試であれば不合格だったと思う」者は面接試験に価値を置き、その評価結果が合否に関係したと捉えていることが類推される。

一方、学力領域に注目すれば、「思考力・判断力・表現力」に大きな差があることがわかる。すなわち、「小論文」、「自己推薦書」、「面接」で「思考力・判断力・表現力」に有意差がみられ、「一般入試であれば不合格だったと思う」者は、この点がAO・推薦入試で評価されると考えていると言える。既述のとおり、AO・推薦入試と一般入試では求められる学力が異なると認識されているが、特に「思考力・判断力・表現力」に対する認識が異な

ると言えよう。

(小野寺香*)

IV 学生側の期待と教員側の不信

1. AO・推薦入試の拡大に対する認識

大学教員は AO・推薦入試についてどのように認識しているのでしょうか。それについて明らかにするため、「AO・推薦入試の拡大に賛成する」に対して5段階（「とてもそう思う」5、「ややそう思う」4、「どちらともいえない」3、「あまりそう思わない」2、「全くそう思わない」1）のうち、いずれかを選択する形で教員より回答を得た。その回答平均値を示したのが表4である。なお、比較対象として、AO・推薦入試受験者による回答平均値も示している。

表4 AO・推薦入試拡大に対する態度

項目	教員	AO・推薦入試受験者	差
AO・推薦入試の拡大に賛成	2.50	3.42	0.92**

**：p<.01

表4より、教員は全体的に AO・推薦の拡大に対して否定的である一方、AO・推薦入試受験者は肯定的で、両者には有意差がみられる。AO・推薦入試の拡大に教員が否定的なのはなぜであろうか。その理由は、AO・推薦入試においては学力の測定が困難であるという認識があることが想定される。では、現行 AO・推薦入試では、学力4領域をどれほど測定できていると認識しているのだろうか。次節ではこの点を明らかにする。

2. 学力に対する教員・学生間の認識の違い

まず、前提として、大学教員は AO・推薦入試と一般入試では異なる学力を測っていると認識していると言える。これに関する質問項目に対する回答（5段階）のうち、肯定的な回答（「とてもそう思う」5、「ややそう思う」4）が74%であることから明らかである。このことは学生にも同様な認識があることを先にみえてきた。ここでは、AO・推薦入試における様々な評価方法が学力4領域をどれほど測定しているかの大学教員の認識を問い、5段階（「とても評価できる」5、「やや評価できる」4、「どちらともいえない」3、「あまり評価できない」2、「全く評価できない」1）のうちいずれかを選択する形で回答を得た。同様に AO・推薦入試受験の学生からも回答も得、その結果を示したのが表5である。

表5から、全体的な傾向として指摘できるのは、どれにおいても AO・推薦入試受験の学生の方が教員よりも平均値が高く、学力4領域を評価できると考えていることである。教員の平均値は3未満が多く、教員の多くが否定的だと言える。平均値が4以上である項目は、「面接試験」の「関心・意欲・態度」と「思考力・判断力・表現力」、「センター試験」の「知識・技能」であった。「センター試験」で「知識・技能」を評価するという認識は、一般試験にも通じることである。したがって、ここでの新たな知見としては、教員は「調査書」、「小論文」、「面接」のうち、学力4領域を比較的高く評価している「面接試験」を最も信頼しているということである。

一方、「調査書」と「自己推薦書」に関する平均値は低く、それらによって学力を評価することは困難であると考えていることが窺える。今後、「調査書」の活用方法についての

議論が高まることが予想されるが、広島大学教育学部の教員の認識としては、積極的な活用は困難であると考えられる。

表5 提出書類・試験と学力要素に関する教員とAO・推薦入試学生の認識

項目		教員	学生	差
調査書	関心・意欲・態度	2.83	4.00	1.17**
	主体性・協働性	2.80	3.75	0.95**
	思考力・判断力・表現力	2.68	3.46	0.78**
	知識・技能	2.83	3.38	0.55**
自己推薦書	関心・意欲・態度	3.33	4.44	1.11**
	主体性・協働性	2.99	3.99	1.00**
	思考力・判断力・表現力	2.84	3.82	0.98**
	知識・技能	2.66	3.05	0.39*
面接試験	関心・意欲・態度	4.01	4.58	0.57**
	主体性・協働性	3.68	4.28	0.60**
	思考力・判断力・表現力	4.08	4.52	0.44**
	知識・技能	3.68	4.02	0.34
センター試験	関心・意欲・態度	2.31	2.58	0.27
	主体性・協働性	2.12	2.33	0.21
	思考力・判断力・表現力	3.58	3.87	0.29
	知識・技能	4.25	4.60	0.35

**：p<.01 *：p<.05

次に、教員と学生との差に注目すると、「センター試験」以外の評価対象はすべて、有意差がみられる。「センター試験」で測ることができると考える学力は両方で一致しているが、それ以外の「調査書」、「自己推薦書」、「面接」では、概していえば、教員が評価が困難と考えているのに対して、学生は評価が可能であると考えている。学生は「調査書」や「自己推薦書」によって、学力を測ることができると認識しているからこそ、AO・推薦入試に肯定的な態度をとるともいえる。こうした教員と学生との認識の差をどのように埋めていくのかについて、今後は検討の余地があると思われる。（小川佳万*）

V 研究の成果と今後の課題

本論の初発の関心は、大学入学者選抜の方法が、従来の筆記試験から多元的な選考方法への転換が図られているなかで、AO・推薦入試を実施する大学教員と受験者との間で、同入試に対する認識が異なるのではないかという疑問であった。本論では、広島大学教育学部の教員と学生を対象とする質問紙調査からその解明への手掛かりを得ようとした。本論での検討を通じて明らかになったことは以下の三点である。

第一に、AO・推薦入試受験の理由を「高校教員からの薦め」と回答する学生が多い。これは、同入試関する高校教員への丁寧な説明の重要性を示す。また、受験生に

としては、同入試は受験機会の増加を期待するのではなく、一般入試の忌避として戦略的に選択される側面を持つと言える。

第二に、一般入試受験者とAO・推薦入試受験者のAO・推薦入試に対する認識が異なる。一般入試受験者はAO・推薦入試に対して全体として否定的に捉えているのである。これはAO・推薦入試の場合、評価尺度の多元化によって受験生からは選抜基準がよく見えないことと関係すると思われる。基準が不明であるからこそ、「努力」の成果よりも「要領」によって合否が決まると認識される可能性を孕んでいると言える。また、AO・推薦入試入学者が全募集人員に占める割合は依然として少数のなかで、一般入試でも合格したと考える者は30%程度しかいないということも、同入試に対する否定的な認識を表していると言える。

第三に、AO・推薦入試において測定可能な学力について、教員と学生の認識は一致していない。具体的に言えば、AO・推薦入試における「調査書」と「自己推薦書」で、学生は学力の4要素を評価できると考えているのに対して、教員はそうでない。これは、そうした提出書類を評価することを学生側が期待しているとも言え、教員側はその可能性を検討するよう努めることが求められるとも言えよう。(小川佳万*)

引用文献

- 大谷奨「大学入試の多様化と進路選択・進路指導」東北大学高等教育開発推進センター(編)『大学入試と高校現場－進学指導の教育的意義－』東北大学出版会, 2013年, 7-26頁。
- 高校生新聞「「定員の30%に」国立大学が推薦・AO入試を拡大する理由 難易度・日程は?」, 2017年7月20日付 <<http://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/2004>>。
- 菊池明泰ほか「AO入試における多面的評価の導入: ルーブリック評価を用いた入試制度の構築」『大学入試研究ジャーナル』27号, 2017年, 23-28頁。
- 倉元直樹「大学入試の多様化と高校教育－東北大学型「学力重視のAO入試」の挑戦－」東北大学高等教育開発推進センター(編)『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』東北大学出版会, 2011年, 7-40頁。
- 高大接続システム改革会議「最終報告」, 2016年。
- 国立大学協会「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」, 2015年。
- 杉原敏彦・高地秀明・永田純一「AO入試の何が変わり、何が変わらなかったか－広島大学AO入試の10年－」『大学入試研究ジャーナル』25号, 2015年, 117-122頁。
- 中西啓喜「国立大学は推薦・AO入試によって「成績優秀な学生」を獲得できているのか? エリートセクターにおけるマス選抜の導入」『高等教育ジャーナル: 高等教育と生涯学習』2017年, 63-74頁。
- 西郡大「受験生心理からみる大学入試」東北大学高等教育開発推進センター(編)『大学入試と高校現場－進学指導の教育的意義－』東北大学出版会, 2013年, 27-65頁。
- 広島大学「平成31年度入学者選抜に関する要項」2018年。
- ベネッセ教育研究開発センター「大学生が振り返る大学受験調査」2012年。
- 山下仁司「高校・生徒からみた高大接続の課題－高大接続の真の課題は何か－」『高等教育研究 高大接続の現在』2011年, 87-105頁。
- 読売新聞教育部『大学入試改革－海外と日本の現場から－』中央公論新社, 2016年。